

決断 群馬の経済人～ 印刷物デザインとウェブに資源集中

SUNDAY PERSON

印刷業で創業したマルキンアド（富岡市下黒岩）はウェブデザイン事業に参入して10年余り。今では世界的なコンピューターソフトメーカーのホームページ作成も手掛ける。山田勝博社長は「ソフト開発は困難が多いが、それを乗り越えた時の喜びは大きい」と語り、若い社員の成長を見守っている。

（報道部 齋藤洋一）

戦略

ファブレス化で 最高の品質提供

業種転換には困難が付き物。印刷業から印刷物のデザイン業、ウェブデザイン業への進出に迷いはなかったのか。

2002年、印刷機械を自社所有しない戦略「ファブレス化」を決めた。自社にあった大型の印刷機5台を処分し、外注に出すことにした。印刷業なのに印刷機を持たなくて本当にいいのかって、何度も考えた。正直、勇気のいる決断だった。

印刷機が自社にあると、どんな印刷物でもそれを使ってしまう。けれども印刷物はポスター、チラシ、パンフレットなど多彩で、すべてに対して望んでいる品質を得ることはできない。外注に切り替えたことで、仕事内容に適した印刷会社を選び、顧客に最高の品質を提供できるようになった。

これに伴って、自社の経営資源は印刷物のデザインやウェブ事業に集中できるようになった。あの時決断

山田 勝博社長



「厳しい意見を言ってくれる存在をつくるよう心掛けている」と語る山田社長

マルキンアド

印刷物デザインと ウェブに資源集中

決断

群馬の経済人

したが、もう一つのステージに行けたと思っている。
印刷物のデザインは、アイデアやセンスの必要な仕事だ。きれいな

写真を載せたり、情報を詰め込んだだけでは面白くない。どんなことがあのか。

ポスターやチラシは「見てもうえないのが前提」だ。街角にポスターを張って、人々がその前で立ち止まる確率は相当低い。そこで気を付けているのが、情報を削ること。あれもこれもでは、何も伝わらない。これを伝えたいという部分に絞り込むことが大事だ。

もう一つの進出先であるウェブデザインは、技術革新がすすましい業界。生き残る努力が必要だろう。

略歴 やまだ・かつひろ 1961年8月、富岡市生まれ。小中学校と吉井高校在学時は野球に熱中。ファーストを守り、左打ちの長距離打者だった。高校卒業後に百貨店の催事を企画する東京の会社に2年間勤務し、家業の総合美術丸金（現マルキンアド）に入社した。96年に社長就任。サウナが好きで県内や東京の施設を巡り、12分間を3回入る。読書は歴史小説やビジネス書を中心に月3～5冊。家族は妻と中1、小2のともに娘。富岡市在住。

確かに大変だ。思い通りにいかず、スランプに陥る社員もいる。困難の真ん中はつらくて、悩み、苦しむ。もがくが、その困難が大きいほど乗り越えた喜びは大きい。自分自身の成長にもなる。もっとも、うちの社員は互いに協力して、どんな困難でも乗り越えてしまっし、その苦闘を楽しんでるように見える。社員はみな若い。安心して仕事を任せられる。

決断 群馬の経済人～印刷物デザインとウェブに資源集中



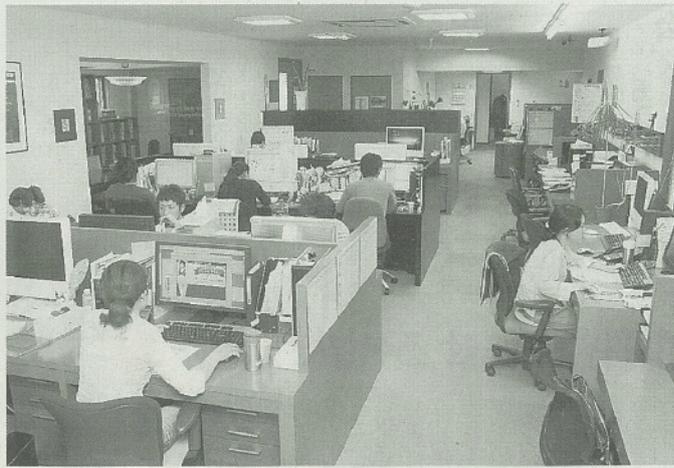
「コンピュータは使いこなすだけでなく大変。そのシステム部分を作るとなると、どんな技術なのか想像もつかない。」

実は私も、コンピュータは苦手。けれども苦手だからいい面もある。社員が作ったシステムを試してみても、「もっとこうの方がいい」と消費者目線でズバッと指摘できる。専門知識があると、「あそこを直すのは難しい」と分かっってしまうので妥協してしまっただろう。

情熱

「節目の年に休暇とボーナスを支

大画面のパソコンが並ぶマルキンアドの本
社。若い社員が仕事に集中している



SUNDAY PERSON

「こんな会社

1973年、印刷会社として富岡市内で創業。86年にデザイン事業部を開設し、パンフレットやポスターのデザイン事業へ参入した。98年ごろからはホームページ作成などのウェブデザイン事業に力を入れ、現在は印刷物のデザイン事業とウェブ事業が5割ずつ。拠点は本社（富岡市下黒岩）と東京事務所（渋谷区恵比寿）の2カ所。従業員36人。年商5億円。

社員よりも早く
出勤し店内清掃
「父親の死去に伴い、30代半ばで

給しているが、10年自にもとめる1
カ月間の休暇と20万円のボーナスは
特に魅力的だ。
社会人になっても、堂々と長く休
める仕組みをつくりたかった。今の
ところほぼ全員が取得している。あ
こがれのサッカー選手の生家を訪ね
るため、イタリアの田舎町に行った
者もいる。リフレッシュして職場に
帰ってきてくれることが、次の仕事
の成功につながる。当社は人材確保
に有利な立地ではない。休暇に特徴
を出すことで、優秀な人材獲得にも
つながる。

社長に就いた。とすれば、自己流
でワンマンな経営になってしまいが

人材確保を考え 大型休暇制度

稲盛氏の言葉 心刻む

あの時

1996年、社長だった父の征司
氏が亡くなった。父の跡を継ぐこと
は、中学5年時の学校行事「立志式」
で決意していたことだが、いざとな
ると不安だった。会社は売り上げ減
らさぬために必死で、悲しんでいる
暇はなかった」と当時を振り返る。
亡くなった2日後、京セラ創業者
の稲盛和夫氏が開く盛和塾の例会に

出席した。稲盛氏に父の死を告げる
と、「至誠の感ずるところ、天地も
これが為に動く」といって「百善徳の
言葉を教えられた。「誠を通して一
生懸命にやれば、神様が見てくれて
いて、天地など周囲の環境は自然に
良くなる」と解釈。以後、誠心誠意
を持って仕事に情熱を燃やした。
「父が亡くなった2日後なのに、
例会を休まなかったのは、今でも不
思議でならない。でもその時の言葉
が、自分を変えてくれた」。運命の
言葉を心に刻んでいる。

だが。
私は常に、厳しい意見を言ってく
れる存在をつくるよう心掛けてい
る。その意見によって自分の欠点に
気づき、成長できるからだ。
教えられたことの一つが、社員よ
りも先に会社へ行くこと、そして率
先して掃除をすること。毎朝オフィ
スの掃除を続けている。今では社員
にも浸透し、きれいに掃除すること
が社風になっている。当たり前のこ
とだが、当たり前にできていない会
社もあるだろう。
「社長を含めても平均32歳という
若さ。どう成長、発展していくかが
楽しみだ。
理想は社員一人一人が自立しつ
つ、連帯する会社。鳥は一羽ずつが
自立しているが、群れはきれいな三
角形になって飛ぶ。向きを変えても
またきれいに並び直す。そんな姿が
理想だ。
現状でも理想に近いが、ちよつと
したスレでも年月がたつと大きな差
になる。細かい部分まで気を抜かず、
さらに精度を上げていきたい。」